

## 青い山脈と戦後改革:「古い上着よさ ようなら」は達成されたのか

若く明るい 歌声に  
雪崩は消える 花も咲く  
青い山脈 雪割桜  
空のはて 今日もわれらの 夢を呼ぶ

古い上衣よ さようなら  
さみしい夢よ さようなら  
青い山脈 バラ色雲へ  
あこがれの 旅の乙女に 鳥も啼く

雨にぬれてる 焼けあとの  
名も無い花も ふり仰ぐ  
青い山脈 かがやく嶺の  
なつかしさ 見れば涙が またにじむ

父も夢見た 母も見た  
旅路のはての そののはての  
青い山脈 みどりの谷へ  
旅をゆく 若いわれらに 鐘が鳴る

少し前まで懐メロと言えば、「青い山脈」が断然  
トップでした。1980年のTBS「日本人の好む歌べ  
すと1000」調査で1位、1989年のNHK「昭和の  
歌・心に残るベスト200」でも1位なんですね。

懐メロ番組の最後には玉置宏や高橋圭三など  
という司会者が出てきて「さあ全員で、青い山脈  
を歌いましょう」と言うと、チャ、チャ、チャー  
ン、チャ、チャ、チャーンといういかにも懐かしい  
イントロが始まり、出演者全員で大合唱というシー  
ンがよく見られたものです。

もともと歌ったのは藤山一郎と奈良光枝とい  
う人たちで、「影を慕いて」も歌った藤山一郎は  
国民栄誉賞をもらった超大物です。大晦日の紅  
白歌合戦の最後に「蛍の光」を皆で歌いますが、  
昨年亡くなった宮川泰の前に指揮をしていたの  
が、藤山一郎なんですね。作詞は「東京行進曲」や

「東京音頭」でも有名な国民詩人西条八十、作  
曲は「東京ブギ」でも有名な服部良一で、この人  
も国民栄誉賞をもらっています。

もともこの歌は、映画の主題歌です。同名の  
石坂洋次郎の長編小説(1947年「朝日新聞」連  
載)をもとにした1949年の映画があり、その主題  
歌でした。映画は原節子主演、今井正監督で大  
ヒットしました。地方の女学校を舞台に、にせラ  
ブレター事件を民主主義的に解決しようとする原  
節子扮する女教師の奮闘を描いています。

日本のテレビドラマには学園青春ものという  
ジャンルがありました。私の世代で言うところの村野  
武憲の「飛び出せ青春」や中村雅俊の「われら青  
春」ですが、その原型とも言うべき作品です。映  
画の「青い山脈」の最後には池部良が海岸を走  
り回ったり、海に向かって「君が好きだ」と言  
ったりするんですね。

### 古い上着と戦後改革

さてこの歌で、当時鮮烈な影響を与えたと言  
われるのが、二番の「古い上着よさようなら」と  
いう歌詞です。当時は戦後改革の真っ最中であり  
、古き「軍国主義」から新しい「民主主義」への  
転換点だったわけです。

もともと戦後経済を考える場合、2つの見方  
があります。戦前と戦後の

- [1] 断絶
  - [2] 連続
- ですね。続いているか、切れているか、です  
から、どちらかしかないと思うかもしれませんが  
、「戦中」という時期を考えると、2つの見方が  
加わっていくわけです。
- [3] 戦中が異常事態で戦後に本来の状態に  
「回帰」
  - [4] 戦中期に「逸脱」したまま現在に影響
- もともと自由で民主主義的な社会を日本は達  
成しつつあり、戦後にそれに回帰したという考  
え方と、戦時下でなされた改革が今なお影響  
しており、あるべき姿から逸脱しているという  
見方です。

## 父も夢見た 母も見た

筒井清忠はその著書『西條八十』(中公叢書)のなかで、「父も夢見た母も見た」という歌詞について興味深い指摘を行っています。戦後の自由や民主主義は、当時の若い世代だけのものではない。まして戦後に外から与えられたものではない。日本でも、大正から昭和初期には自由な社会が出現していたんだ、と言う八十の主張が父も母も、という歌詞に込められているという指摘です。そこから不幸な事件の連鎖から、一時的には軍国主義に敗退したものの、戦後に本来あるべき姿を取り戻した、という考え方につながります。

たしかに青い「山脈」は昔からあるもので、青いチューインガムや青いコーンパイプではありません。「かがやく嶺のなつかしき 見れば涙がまたにじむ」と続けば、八十の意図は明らかでしょう。

歴史家の坂野潤治は一連の研究で、戦前にもかなり優れた民主主義体制が存在した、と述べています。しかしその民主主義がなぜ軍国主義を生んだのか、新たな問題は残されています。

## 1940 年体制

このような戦後改革のポジティブな面を強調する見方とは別に、近年では戦中・戦後の連続性を重視する考え方が唱えられました。(詳細は岡崎哲二・奥野正寛編 (1993)『現代日本経済システムの源流』日本経済新聞社を参照してください。)なかでも野口悠紀雄の議論は「1940 年代体制」のフレーズのもと一般にも大きく流布しました。

今の日本を作ったのは、戦中に総力戦遂行のために強権発動で整備されたシステムであり、その意味で日本は戦時体制が終わっていない、と主張するものです。

野口悠紀雄は労働・金融・財政など広範囲にわたって議論を展開しています。たしかに租税における源泉徴収制度や間接金融における統制方式など、戦時体制下に整理統合された業種は広範囲に及んでいます。一方で労働慣行の戦中起源説に対しては強い反論があります。事実、映画「青い山脈」は労使が厳しく対決した東宝争

議のさなかに作られました。

ここでは 40 年体制の 2 つの例を挙げておきましょう。京王井の頭線と京王線は直通運転をしていませんが、それはレールの幅が違うからです。戦前は井の頭線は実は小田急系の会社だったのですが、戦時体制下の陸上交通事業調整法により、小田急も京王も大東急という会社に統合され、戦後に井の頭線は京王と統合されたんですね。

和泉元彌騒動で有名になった狂言の宗家ですが、実はこれも 1940 年体制の産物なんですね。狂言には 2 つの流派がありますが、永らく宗家不在の事態が続いていました。しかし戦時体制下で 1941 年に大蔵流が、43 年に和泉流が宗家を再興し、体制が整備されたわけです。

## 戦後民主主義とさみしい夢

戦後の日本が達成した自由と民主主義が、外から借りてきた新しい上着なのか、山脈のように風土に根付いたものなのか、それは新しくて古い問題です。映画の青い山脈ではボスたちの談合で問題を解決するのではなく、「啓蒙」の担い手である原節子の奮闘のもと、無記名投票での大逆転が起こり、民主主義が勝利します。

民主主義のもと正しいものが勝つのか、そして民意は常に正しいのか、「青い山脈」はそんな疑問を持たない時代のひたすら明朗な歌だったといえましょう。

## スーダラ節:

### 戦後民主主義に咲く無責任男

チョイト一杯の つもりで飲んで  
いつの間にやら ハシゴ酒  
気がつきゃ ホームのベンチでゴロ寝  
これじゃ身体に いいわきゃないよ  
分かっちゃいるけど やめられねえ

\*

ア ホレ スイスイ スーダララッタ  
スラスラ スイススイ  
スイーラ スーダララッタ  
スラスラ スイススイ  
スイスイ スーダララッタ  
スラスラ スイススイ  
スイスイ スーダララッタ  
スーダララッタ スイスイ

ねらった大穴 見事にはずれ  
頭かっときて 最終レース  
気がつきゃ ボーナスマスっからかんのカラカラ  
馬で金もうけ した奴あないよ  
分かっちゃいるけど やめられねえ

\* 繰り返し

一目見た娘に たちまちホレて  
よせばいいのに すぐ手を出して  
ダメしたつもりが チョイトだまされた  
俺がそんなに もてる訳ゃないよ  
分かっちゃいるけど やめられねえ

\* 繰り返し

#### 日本の「特殊性」

日本経済論の最大のポイントは、日本の特質をどう評価するか、という点です。この問題は戦前の「日本資本主義論争」にまでさかのぼる根深いもので、現在でも論争の余波は知らず知らずに続いているのです。日本の農民や労働者は親

分や地主の権威主義、温情主義などの半封建制のもとにあり、欧米のような市民社会を達成するのに足かせとなっているという「講座派」の議論が一方にあり、もう一方に特殊性強調を批判する「労農派」の議論がありました。

現在でも日本経済の改革を語るとき、自由な市場競争を求め、終身雇用や年功賃金などの「特殊性」の打破を求めるのは、言ってみれば「講座派」の伝統と言って良いでしょう。

その伝統の中で延々と問題となっているのは、日本人の個の自立のあり方です。戦争直後に付和雷同する日本人の特性を痛烈に批判したのは丸山眞男でした。

丸山眞男は敗戦後の東京裁判の被告たちを激しく非難していきます。なりゆきで始まってしまった以上従うほかない(既成事実への屈服)と述べ、職務権限に従って行動するしかないという「専門官僚」の「権限への逃避」という弁明を行う被告を同じ敗戦国のナチスと比較して、批判したのです。流れができたうえではやむを得ない、私にはそれを止める権限はなかった。いつもどこかで聞いたような言葉ではないでしょうか。丸山眞男はこのような指導者で構成される日本のシステムを「無責任の体系」と呼びます。

#### 無責任男出現

この無責任の体系を打ち破る存在として現れた無責任男が植木等扮する平均(タイラ・ヒトシ)と考えることができるでしょう。植木等は 1960 年代に 30 本も作られた東宝映画やテレビのバラエティ番組で、言わば人間関係のしがらみの外から「異邦人」として現れます。1962 年の映画「ニッポン無責任時代」では、主題歌「無責任一代男」で、

とかくこの世は無責任

コツコツやるやつあ ご苦労さん

と歌い上げ、スーダラ節の「ショボクレた」男から脱皮します。それは「何の責任ももたぬ体制にたいしては無責任な態度で居座るほかない」、そして無責任男は「自立した個人という神話の楽天的な確認」と評されるほどでした。(小林信彦『日

本の喜劇人』

この無責任男は当時の人々に熱狂的に迎えられました。植木等個人が「あーすいすいと生きてゆく男はぼかあうらやましいですよ」

とまで述べたように、そのキャラクターはしがらみの中で生きる日本人の憧れであったのです。

### 無責任男と外からやってくるヒーロー

人間関係のしがらみの問題は日本社会を考える上で、正面から取り上げられることは少ないのですが、本当は一番重要なのではないのでしょうか。「関係ないね」といいながら、「ひとりで旅に出る」ことができれば、どんなにすっきりすることでしょう。

フリーター等の若者の非正規化雇用の問題が永らく放置されたのも、言わば「フリーター」という言葉が自立した自由な個人を示すという、人材派遣業や仲介業などのイメージ戦略にあるのではないのでしょうか。

しがらみの外からやってくるヒーローはいつの時代も望まれています。昨冬ヒットしたドラマ、「ハケンの品格」の主人公がしがらみをもたない派遣社員のスーパーウーマンであることと、そして「あっしには関わりのねえことでござんす」で有名な木枯らし紋次郎にどこことなく似ていることは偶然ではありません。

わが国の伝統では、このような外からやってくる自由なヒーローはニヒルでそして流れ者として、ドラマの終わりにほどこかに去ってゆきます。

しかし植木等扮する無責任男は笑いながら居座ります。そして社長となり、家庭を築くのです。

無責任男は無責任で居直る男から、次第にスーパーマン化してゆきます。そして難題を次々と解決していったのです。

### 好調経済に咲く無責任男

植木等が輝いたのは

- 1960年代の高度成長期であり
- 1990年前後のバブル期でした。

再吹き込みを中心とする CD「スーダラ伝説」がヒットし、1990年には植木等は紅白歌合戦に出

場し、歌手別の最高視聴率を獲得しました。

1980年代を通して、植木等やクレージーキャッツは、小さなしかし息の長いブーム下にありました。「スーダラ節」や「ハイ、それまでヨ」などのシングル盤レコードは復刻され、浅草東宝など東宝系映画館で60年代に30本も作られたクレージー映画の5本立てオールナイト上映がなされました。筆者が60年代の植木等に接したのは、この時期です。

この小さなブームに火が付いたのはバブル期であったのは、偶然ではないでしょう。バブル期の言わば見せかけの豊かさや、やけっぱちな気分が植木等を再登場させたのではないのでしょうか。

無責任の体系の中で無責任に振る舞うのは、本当に無責任なのか、というパラドックスはバブルというより大きなパラドックスのもとでパラドックスにならなくなったのです。

植木等さんは惜しくもこの3月に亡くなりましたが、その紅白での勇姿は今でもYouTubeで見ることができます。

次の無責任男はいつ現れるのか、それは分かりません。しかしその時がバブルであっては困りますし、高度成長の時代はもはや再来しないでしょう。そう考えると無責任男はもはや表れないのかもしれない。

## あゝ上野駅:

### 民謡と勤労と高度成長の世代

どこかに故郷の香りをのせて  
入る列車のなつかしさ  
上野は俺らの心の駅だ  
くじけちゃならない人生が  
あの日ここから始まった

就職列車にゆられて着いた  
遠いあの夜を思い出す  
上野は俺らの心の駅だ  
配達帰りの自転車を  
とめて聞いている国なまり

ホームの時計を見つめていたら  
母の笑顔になってきた  
上野は俺らの心の駅だ  
お店の仕事は辛いけど  
胸にやでっかい夢がある

#### 若者はかわいそうなのか

筆者は年金の世代間不公平論やら、若者がかわいそうだ、とか言う議論には常々疑問を抱いている。物質的には現在と過去では雲泥の差があり、どう考えても、現在の若者は昔より物質的に恵まれているし、寿命も長く、人生を楽しめるというものだ。もちろん就職氷河期があったし、何が幸福かは分からないから、精神的に若者がつらい立場にある可能性は否定できない。しかし経済学で扱う解決策のほとんどは所詮物質的なものだから、本当の解決策にならないのではないだろうか。

特に理解できないのは、1961年、昭和36年生まれの私より年長の方の世代間不公平論である。明らかにその世代が育った日本は貧しかったし、その前の世代は戦争に直面している。だからその世代の年金にはもっと配慮が必要と言ったのは数理経済学・経済成長論の泰斗故稲田献一

教授(季刊社会保障研究 97 年秋号)である。たしかに年金財政は危機的だが、機械的に収益率を当てはめて世代間不公平を主張するのは、高度成長のプロセスを無視しているように思う。

現在は昭和 30 年代ブームだそうであり、「ALWAYS 三丁目の夕日」などの映画が大ヒットしている。人情のぬくもりのノスタルジーに浸るのもたまにはいいが、面倒な醤油や米の貸し借りよりも、コンビニがあったほうがいい、と皆が思うから、実際にもそうやってきたというのは、味気ない意見だろうか。

#### 就職列車

作詞関口義明、作曲荒井英一の「あゝ上野駅」は、井沢八郎が歌い1964年に流行した。井沢八郎は女優工藤夕貴の父であり、2007年1月に亡くなった。

この歌はいわゆる集団就職列車をうたったものである。集団就職列車とは、中学・高校卒業直後の学生を東京に送り込む列車であり、東北地方から上野駅に降り立った。現在では上野駅に「あゝ上野駅」の歌碑が建立されている。

集団就職列車の運行開始は1954年(昭和29年)であり、1975年(昭和50年)が運行終了であるので、21年間に渡るが、その最盛期は1960年代の高度成長期に重なる。

加瀬和俊著『集団就職の時代』(青木書店)は、この時期を活写している。戦後当時は農家の次三男問題といわれるものが深刻であった。旧法では長男がほとんどを相続する長子相続が一般的であったが、敗戦後の新民法下では均分相続、つまり生まれた順番にかかわらず等しく相続する方法が定められた。

しかしもともと狭隘な日本の農地では、二人も三人もに農地を分割すれば、共倒れとなってしまう。そこで長男は農業を継ぐものの、次三男は都会に出るのが一般的であった。加瀬の著書からの孫引きで恐縮だが、農業経済学者並木正吉は「農業の手伝いをさせると均分相続をしとせまられる」そこで都会へ就職させる、という事情をレポートしている。

### 消えた望郷と勤労の歌

高度成長期の歌謡曲に東北など地方の香りがすることは、就職列車に代表される大きな人口移動が背景にある。その中でも大立て者は春日八郎であり、三橋美智也であった。戦後最大のレコードセールスを誇った歌手は美空ひばりでも、三波春夫でもなく、民謡調の三橋美智也である。

彼らの歌の特徴は望郷の念である。辛い「ホームの別れ」(「赤いランプの終列車」・「哀愁列車」)があり、東京で故郷を恋いうる場合(「リンゴ村から」・「別れの一本杉」)と、故郷で東京に行った恋人を思う(守屋浩「僕は泣いちっち」)場合の二つがある。

これらの望郷の歌は「木綿のハンカチーフ」や「渡良瀬橋」などに受け継がれ、卒業式を歌う一連の曲に同化したようだが、一方で完全に消えたのが、勤労の歌である。

「若いおまわりさん」、「新聞少年」、「月の法善寺横町」、みんな労働の哀歓を歌っている。これに比べて就職氷河期は新しい勤労の歌を生んでいない。「赤いフリーターのブルース」とか、「ニートで行こう」、「派遣人生」なんて言う歌はもはやない。

そこが高度成長期と現在が違うところなのだろう。高度成長期にはどこかで苦労は報われるという確信があったが、現在にはないようだ。つらい修行に耐えれば、道は開けると言った「でっかい夢」は、修行という訓練プロセスを欠いたフリーターではもはや形成されないのであろう。

### 三畳一間の村上春樹

ここまで書いてきたことは、何を古めかしいことをと、若い読者は思うかもしれない。しかしこの集団就職の時代は、今の中高年層に重なっている。1954年から75年まで集団就職列車は運行されており、中学卒業の15歳で乗車すると仮定すると、1939年から、1960年生まれの世代までが該当する。そう考えると、今の学生諸君の祖父祖母の世代から、両親の世代までになるのである。事実、前総務大臣菅義偉は1948年生まれでそんなに年配者というわけではないが、彼も集団就職

列車で秋田から上京した一人であった。

この当時たとえ大学生であっても、生活は質素であった。作家の村上春樹は1949年生まれであり、この世代に当てはまる。四畳半フォークなどと言われて、四畳半に同棲するカップルが歌われた「同棲時代」がヒットしたのは1973年であり、かぐや姫の「神田川」も同年である。

村上には西武線都立家政の三畳一間に暮らし、早稲田に通っていたことをエッセイ(村上朝日堂)に記している。村上春樹といえば、ジャズを聴いて、パスタを茹でているというイメージがあるが、彼もやはり団塊世代の一員であったのである。